

シヨツペンハウエルの女子に關する論文と、ラスキンの「セサム、アンド、リリー  
ス中の、リリース、オブ、クウインズ、ガーデンス」とを讀みて、それより提供せら  
れし若干の問題をおもふ。(研究)(承前)

賛助員 千葉安良

(私が此の感想的の論文を書き始めましたのは、私の文科四年生であつた年の秋で、今から三年も前のことと云ふことができます。それで、只今ではその最初の頃は頭の働き具合も變つても参りましたし、思想の内容ももより當初と全く同じではなくなりまして、勿論、女子問題に對する根本思想に於ては、なほ當時と所見を異に致してませんが、つぎめて全篇の調子の一貫を保ちながら立論行筆することが困難にも感じられますし、問題が問題であるだけに、心ゆくまで細論すれば、殆んど一つの小冊子を成す位の評論を必要とするので、それを今迄通りの努力と行筆を以て續けて行き、從來と同じ頁数をいたして参ります。此の先少くとも三年はかゝります。不便は益々加つて参ります上に科學的研究の少い此の幼稚な感想的論文を長年月公表いたしますことを心苦しく思ひますので、「好い加減に切り上げるにこしたことはない」と考へます。それで本論第三の第三章、第四章、第五章に論ずるを豫定しておきました本務論の範圍に屬する諸問題、社會問題の範圍に入るべき諸問題、女子教育問題の範圍中の諸問題は悉く省略致しまして、直ちに第四の結論に移つて、その内の女子教育に就いての私の考を述べて、此の論文を終ることに致しました。)

本論第四、女子教育に就いて私の考。

「女子教育」に就いては「現今の社會の實情により添うて漸次進まねばならぬ」と云ふのが、その實際經營に對する考で、その理想は「女子の本質をより向上させる」といふにある。これは今更らしく茲に言はずとも、すべての女子教育家の考へて居られる筈のことであるが、論の進行の當然の順序として先づ此の大體の

概念を擧げておかねばならぬ。さて然らばそれには如何すればよいかと云ふのが問題であつて、これには各人各自の考へ方によつて、いろいろ異つた意見が生じもし、極めて細かい處まで論じ得るのであるが一口に言へば「女子教育」の理想はこれまで評論の間にのべて來た女子はかうありたいとの希望に叶つた女子を作り上げるにある。妻として母として、人類のなつかしい擁護者として相對界に生命を見出し、それに誤りなく盡瘁し得るやうに、可憐なるやうに、峻嚴なる操守と婉曲なる所作とを有するやうに、生存競争の烈しい世に優勝者として立ち得る敏活なる手腕と聰明なる頭腦とを有するやうに、そして最後には徹底した人生觀を抱いて居て、吾人の生と國家との關係を理解し常に國家國民の發展を忘れないやうに、女子をなしたいといふのである。心情の形式的の陶冶が誤りなくせられ、それに應じた内容的の才能を有する女子をつくりたいのである。それで女子を育て上げるときは飛ばせて跳ねさせてキビ／＼した子供にする一面には、心情のやさしみを養ひたい。女學校の三年位迄は自覺なしにできるだけとび跳ねさせる、四年五年には此の活潑さに伴つて薄つすりと温雅なやさしみの自覺を與へたい。嬌味を伴ふ必要は無い。そんなものは二十を越えれば自然に備はる。嬌味のない温雅なやさしみ、純なる同情とデリケシーを含んだ心持、それを養つてやりたい。更らになほ一つ心情の陶冶において、文學的美術的、音樂的の趣味をやしなつておくことが必要と思ふ。嚴格な道義心に伴つて潤澤な詩美を味はふ心、行ふ方面と味はふ方面と、渦中に入つての生活と、觀賞若しくは批評の位置にある生活とを并行して保ち得るやうに育て、おきたい。更らに此の「心情の教育」において女子に加へられる教育は女學校を卒へて後の世間での教育である。「世の中はさういふものには無い。」お前の考へは若いよ。世間はそれでは渡れませんか」との聲が、如何に世馴れぬ若い女の心に驚愕と悲歎とを與へる

であらうか。若き心に描いた清い美しい世は、想像上のことであつた時に、如何計りの苦しみが湧くであらう。其の刹那の光景は實に悲惨なものである。併し、その時に於いて、私は多くの女子が、そのいたまじさを經驗して欲しい、そして、さらにそのいたまじさの響を心に保つて自ら世間と戦ひ、自己と戦つて、理想の境に近よらんとする努力を終世つゞけて欲しい。その覺悟の築かれるだけに、女子教育の終期迄に育て、おかねばならぬ。事實は教育上の陶冶の影は案外に淡くて、世間の教育が所謂「世の中はそんなものではありません」云ふ力強い教鞭を有して、神にも近かつた優しい清い柔かい心情を破つて冷やかな濁つた硬いものとして行くのである。大人になるに従つて道義に對して「それはそれとして」といふ行き方をすることが多くなるやうに思ふ。「それはそれとして」と形式を繕つておいて、内實は都合本位からの行爲の動機が起つて来るやうになる。併し實際現在の世の中に於ては（むしろ永遠に）止むを得ないこともあらうが、此處にたゞ一點「人中の聖なるもの」に率ゐられて、現實の止むを得ぬ不美不合理に闘つて行く心持があつて欲しい。女子が母となりて、その母親の心の底からの正義の叫びが如何に強くその子を動かし支配するかを知る女子はかけても此の美のために正義のために、自己の、また我が國家のわが民族の優秀性を育て擴げるために現實と闘ふ心、切ない想の裡のストラグルを忘れて欲しくない。女子には此處まで心情の操守を育て、おかねばならない。

智育に於ては、私はごん／＼出来る丈け女子の頭を啓發し開發して行きたい。たゞし、若しそれが女子を家庭の人として迎へるのに障害になるといふ際まで行つた時には、（女子の精神の知的方面の著しい活動が女子の育児を初め家庭の主婦としての、細心な働きに障害を來たすといふ統計上の事實でも上つて來たなら

ば）私は前述の女性觀から出立して、まづ家庭の人として、より完全に行き得る方に、第一の限界をおくのである。これについて、少數の統計的事實の報告はある。しかし最後の立場は「女子を家庭の人として育てる」にあるとしても、其處に達するまでの行程に於いては、此の限界に抵觸しない範圍において幾らでも女子の頭を、より啓發し、より聰明ならしむる手段が講じられると思ふ。それで私は今後「女子教育」の考ふべき問題は、女子に高等教育を與ふるの可否如何とか實科的教育についての若干の問題の研究とかいふ部分的なことではなしに、女子は家庭の人たるべきもの、女子は次代の國民を生み出すために、又現在の社會の家庭のよい主婦となるために聰明な頭腦を有して居らねばならぬといふ前提のもとに、「如何にせば、あらゆる階級のあらゆる種類の女子をより聰明ならしむるを得るか」といふことを講究する様になつて來なくてはならぬと思ふ。現今の處、所謂義務教育に關する勅令及省令即ち小學校令、小學校令施行規則、並びに普通教育施設に關する文部省訓令は、女子の普通教育に就いての最後の立脚地であり、また女子高等普通教育の機關とせられてある各種の高等女學校教育に關する勅令及省令、即ち高等女學校令及び高等女學校令施行規則ならびに、高等女學校及實科高等女學校教授要目が、女子高等普通教育における最後の立脚地となつて居るのであつて、私は大体においてそれに同意はするが、仔細に考究すれば種々の點において改善を望むふしがずぶんある。ことに、今自分の従事してゐる高等女學校教育における學科目の分ち方及その加廢についても、私は研究を要する點を多く認めて居る。要するに女子の智育に對しては「女性としての聰明さ」を増進せんことを目的として、此のために研究し畫策してゆかねばならぬ。事實に於いて、たしかに女子は感情に酔うて、そのために理性を曇らせられ、聰明を破られることが多いのである。此點において、私はシヨツペンハ

ウエルの見方を、或點までは正當とせざるを得ないのであつて、女子が知力において客觀性に乏しいのは、今日に於ては確かに動かすべからざる事實である。それ故にこそ、私はなほさら、或る限られたる年限に於ての女子教育に於て、如何にせば智力を増進し得るか、聰明さを多くし得るか、客觀性を養ひ得るかを大いに考へねばならぬと思ふのである。女子教育家及其の實際に當る人の、切實に研究すべきは永久につゞくべき此の問題であらうと思ふ。なほ一言したいのは特殊の境遇にある女子、特殊の天才をもてる女子、特殊の志望を有する女子に對しては、女子教育家は、以上の普通の女子教育の立場を確立したならば、幾らでも大膽に、幾らでも進取的に考へて、その特殊なる女子を發展させて欲しい。所謂自己發展主義のかがやかしい方面に趣かずあらゆる犠牲に甘んじて、男子に比較して申すのではありませぬ。たゞ、絶對的に女子を考へてであります。私は、女子は男子に比して云々といふことは、できるだけ此の論においてはさけて居ります。それは此の論の抵觸すべきことではないのでありますから、誤解して下さらぬやうに「人類のために」「棄石」の生涯を送る「地の意義に忠なる」女子への、せめてもの同情として、特殊の女子は出来るだけ發展させるといふ考を、社會一般の人、又男子の方に多くおこしていただきたい。中庸を立脚地として、確と踏み止りをおけば、案外特殊な者に對して、ゆたかな雅量を以て對し得るものである。「少數の例外の女子のためには、別に開かるべき道がなくてはならぬ。少數の天才者、特殊者のためには、特別の道を靜肅に開き與へるだけの同情と雅量とが、社會と男子とに有つて欲しい」と私の願ひは、一朝一夕におこつたものでなく、實に積年の希望である。女子の帝國大學入學とか聽講とかいふやうな問題についても、社會及男子の雅量が今少しゆたかであつて欲しいと思つてゐる。實際、まことの有識の士は十分に豁達な主張を、此の問題についても、

公けにして居られる。併し、實際問題は實際をよく考へねばならぬ。一事の及ぼす影響は思ひがけなく大きいことがある。慎重は必要であるが、その中庸の立脚地と特殊者を育てる立場とを、少くとも女子教育家は明瞭に區別して、ストリクトな方面と、ボールドな方面とを持して居たいと思ふ。更らに附言したいのは社會の下層にある女子に對しての教育即普通初等教育においては、所謂健實なる出精主義を以て徹底した、汗の中に清々しい喜悅を味はつて、爲す人働く人としての幸福なる生涯を送るやうに、教育を與へ、くだけた世間的の聰明さ、所謂「判つた女房」をつくり上げねばならぬことである。「判つた女房」の健全なる心身の働きは、如何に國家の兵力富力を充實さすか判らぬ。實に尊い女性は、國家社會のやゝ下層に多くあるわけである。その多くの尊い女性のために、よくその境遇と職分とを考へて一生の強い信念を與へて置くことも、亦女子教育家としては考へなくてはならぬ。

感情の教育においては、女子はその知から入り得ぬ所を、感情から入るのであつて、たゞその美はしい感情又は鋭い感情の動いて居る處にのみ、女子は天地の眞に呼吸して美はしく榮え、眞天地の大生命の中に生活しうるのだと思ふ故に、鋭い敏感な性を損はぬやうに育てたいと思ふ。しかしこれは實に程度問題であつて、感情にの酔心地は、女子に天地の眞に呼吸する唯一の道を教ふるとともに、ともすれば又夢幻の世にさまよはしめて、現實の嚴格なる眞理と離れさせるやうにする。それ故に一方意志の力を以て、若しくは理性の力を以て、これを矯正する心持を與へておかねばならぬが、私はどこまでも、女子に感情のうごきななくさしめないやうに教育したいと思ふ。複雑な理智によつて動かさるゝは男子である。女子までが政略にどんだ人、複雑な理智に率ゐられて時々刻々に行爲する人となつたら、其の世の中は、男子にとつてもいたま

しいものとならう。自覺ある國民であることまでを否定するのではないことは勿論であるが。例へばニイチエは小さき報恩の念を、人類永遠の向上の敵と笑つた。彼の智は彼の此の結論を産出した。併し女子は恩を受けたと感謝する念が深く、そして、それはとても自分の力では報い得るものではないと云ふ苦しい想に幾度か泣いて、小さき報恩の念を放擲するのである。此の事一つに就いて考へても、女子は感情によつて、男子が理性的判断によつて達する處を直覺するを、知り得るではないか。

体育に就いては、申すまでもない。女子に立派な身体をつくらねばならぬのは、女子自身のために又人類全体の子孫のために、極めて必要であることは、世の全体の人の考と少しもかはらぬ。實に敏捷な健康な彈力に富んだ女子を育てるために、此の方面の研究は亦永遠につかねばならぬものである。イラスティックな、ヴァイタルな、そしてデリケートな身体を有する女子が、次第次第に増して行かねばならぬ。學校の体操はもとより、舞や躍や茶湯や又は薙刀などの方の心のある曲線の運動を、女子の身につけるといふことも、女子の体育の方から考へねばならぬことであらうとおもふ。

以上は「女子教育」に就いて、日頃考へて居ることの大体を述べたのであるが、みなそのどの一項をとつても、研究せねばならぬことは、無限に湧いて來るとおもふ。世に人類のある限り、女子の存在する以上、「女子」及び「女子教育」のことは、常に研究されて行くべきことであるとおもふ。私達は小さいながらに、その問題の解決に向つて、突進して行くのである。因に、先般公けにせられた建部博士の「教育行政研究」中、女子教育の研究は、我國女子教育に就いて考へる人の、せひ一讀すべきものと信ずることを附言しておく。

括論

考へ續ければ、問題は幾らも起つて來る。しかし私は如何に考へても、如何に研究し畫策しても、之は女子たる人格の内容の改善充實のために爲さるべきもので、女子は「成人」ではなくて「爲す人」であるとの根本の考に變りは來ないであらうと思ふ。

シヨツペンハウエルとラスキンとの女子に關する論説は私を促して、敢て如上の考を此誌上に公けにさせた。筆をおかうとする時、彼のジョセフインのなつかし叫が胸の裡に響いた。彼女は嘗て美はしう云つた。「私は常に他人を愛さずには居られない。そしてその報として、他人からも絶えず愛せられずには居られない。」

“It is” she once beautifully remarked, “a necessity of my heart to love others, and to be loved them in return.”

自己の快樂のために考へたならば、此の言は歡喜の涙を以て味はへないであらう。しかし私は諸姉が十分に此の語を悦んで下さること、信ずる。(完)

(貴重な紙面を永々と拜借いたしましたことを謝します。そして研究としては誠に不十分なものでありましたことをお詫び致します。もし何なりと御批正いたゞくことができましたら此上ない幸福と存じます。)